

その他（翻訳と解説）

アメリカにおける戦後の異文化研究

Research in Cultural Diversities in Postwar U.S.A.

菊地 敦子 福井 七子
Atsuko Kikuchi Nanako Fukui

This section of *An Anthropologist at Work* that we are translating includes the chapters, “The Postwar Years: The Gathered Threads” by Margaret Mead and “Recognition of Cultural Diversities in the Postwar World” by Ruth Benedict. Both of these papers describe the urgent need after the war for Americans to understand the cultures of the countries that they defeated in the war and that they were now to occupy. Benedict felt this urgency more than anyone else. She wanted to make sure that the Americans understood the Japanese people and made their decisions wisely. She wrote the book *Chrysanthemum and the Sword* for this purpose. Benedict’s commitment to seeking world peace by understanding ways in which other people live their lives is described in “Recognition of Cultural Diversities in the Postwar World”.

In “The Postwar Years” Mead describes somewhat bitterly, how after the death of Franz Boas, Benedict worked on the book *Chrysanthemum and the Sword* almost secretly without consulting her colleagues. The book was a huge success and offers of funding poured in, allowing Benedict to apply her analysis of national character to other countries. This research took Benedict to Europe. But on her return to New York Benedict passed away.

キーワード

マーガレット・ミード、ルース・ベネディクト、ジェフリー・ゴラー、
『菊と刀—日本文化の型』、戦後の文化研究

解説

本稿は文化人類学者マーガレット・ミードが友人でもあり、師でもあったルース・ベネディクトの死後10年を経た1958年に、ベネディクトが遺した論文（未発表も含む）、書簡、日記などをミードの視点によって纏め、1959年に出版した *An Anthropologist at Work* (Houghton Mifflin Company, Boston) の一部を翻訳したものである。*An Anthropologist at Work* は6章で構成されている。そして各章を補完する目的もあり、章の最初でマーガレット・ミードが必ず

説明的な解説を書いている。ベネディクト研究をする上でその章がどういった意図で構成されているのか、また最も身近な存在の一人であったマーガレット・ミードが各章に対してどのような思いをもっていたのかという心の動きを知る上でも非常に興味深い論文の構成となっている。

最初の翻訳、*The Postwar Years: The Gathered Threads* (「戦後の歳月—結集された力」) (pp. 426-438) はマーガレット・ミードによって書かれたものである。サピアが死亡し、ボアズも亡き後、ベネディクトが全力を傾注した現代文化研究、それもどういった人たちで構成されたのか、またベネディクトのこのプロジェクトへの思いをミードは詳細に語っている。なかでもベネディクトが常に心していたグローバルな視点で行なおうと腐心していた様子を淡々と語っている。

二つ目に取り上げたルース・ベネディクト自身による *Recognition of Cultural Diversities in the Postwar World* (戦後世界における文化の多様性を認識する) (pp. 439-448) は、ベネディクトが信念としていたこと、つまり文明諸国間の文化的相違を認識することは、国際協力を促進するのだという強い思いの一端を知ることができる論文である。この論文は1943年7月の学術雑誌に掲載されたものである点を見ると感慨深いものがある。

「戦後の歳月—結集された力」のなかで注目に値する箇所は『菊と刀』に関する部分であろう。そこにはミードとベネディクトの長きにわたる関係性、そしてジェフリー・ゴラーとの関連もあいまって、ミードの複雑な心境が表れている。

第二次大戦中、文化人類学者を含めて多くの学者は戦時情報局 (*The Office of War Information*) に関わっていた。正式名称はアメリカ合衆国戦時情報局 (以下戦時情報局とする) で、大統領令により1942年6月に設立され、国内情報局と海外情報局で構成されていた。海外情報局ではラジオやパンフレットなどを通して、海外における敵味方双方に対して戦争がいかに無駄であるかを説得し、同時に連合国側の合法性と誠実な意図を知らしめようとした。(ケント: 1997: 182) 1943年の夏頃に始まった戦時情報局での研究は、まずヨーロッパ研究から始まった。そして戦争の状況がヨーロッパから日本に焦点が移ってきたことから、ベネディクトは日本研究を命じられた。なぜ日本語もわからない、日本に行ったわけでもない彼女が日本研究の長に選ばれたのかは、拙著『日本人の行動パターン』(福井: 1997) の解説を参照していただきたい。戦時情報局が日本人研究に求めたのは、何年も日本滞在経験をもつミッションナリーなどの意見ではなかった。それは多くの場合バイアスに左右される傾向があったからである。戦時情報局が文化人類学者に求めたのは文化研究の専門家による日本人分析であった。彼女に課せられた任務は、文化人類学者としての知識を最大限用いて、「日本人とはどのような国民なのかを詳しく説明すること」であった。ベネディクトは日本研究の長となったのである。しかし長とはいえ研究助手がいるわけではなく、最初の頃はタイピストが一人いるくらいだった。後に彼女の助手となったのがロバート・ハシマであった。彼はアメリカに生まれ、日本で育ち、後にアメリカに帰国し、外国人隔離収容所に抑留された経験を持つ「帰米」であった。(福井: 1997:

152-153)

戦時情報局時代、ベネディクトは日本人に関するレポートを「日本人の行動パターン」としてまとめた。これは日本人の倫理規範、責務体系などを中心として書かれたものである。戦時情報局が彼女に求めた命題は、「日本人は変わり得るのか」という点であった。ベネディクトは「欧米の倫理を基準にして日本人の行動を理解することはできない。……日本人の行動にみるパラドクスが西洋人を恐れさせ、日本人を不可解な国民と結論づけさせてきた。しかし、その背景にある日本人の道德規範や責務に関する感覚は、決して西洋人にとって脅威とはならない。」と書く。（福井：1997：157-158）このレポートはNo.25として国務省に提出されたものである。ベネディクトの日本人に対する見方はその当時であって決して多数派といえるものではなかった。

日本研究ということに関していうならイギリス人であるジェフリー・ゴラーの日本人研究は先駆的なものであったといえる。一時期ではあるが彼も戦時情報局に参画していた。詳細に関しては拙著『日本人の性格構造とプロパガンダ』（福井：2011）を参照していただきたい。彼は1943年という比較的早い時期に日本人の性格構造とそれに基づく連合国がとるべきプロパガンダを謄写版印刷でまとめ、それは研究者の間で回し読みされた評判のレポートであった。これはアメリカ政府でも注目され、特にプロパガンダの部分はアメリカ政府による日本計画に大きな影響を与えた問題の論文である。もちろんベネディクトもゴラーのレポートのことは知っていた。しかし、ゴラーの論文とベネディクトの日本人分析とは大きな違いがある。というのはゴラーが日本人の性格構造を分析するに際して前提としていたのは、日本人の行動にみるパラドクスであり、彼の論文はそのパラドクスの所以を解明することにあつた。ベネディクトが日本人の行動パターンを通して訴えたのは、日本人の行動は確かに西洋人からみるとパラドクスに充ちているようにみえるだろう。しかし、日本人の行動の背景にある倫理規範、価値基準を勘案すればそれは決してパラドクスではない、というものであった。ベネディクトとゴラーの日本人研究は似て非なるものであった。

日本研究はベネディクトにとって孤独で我慢を強いられるタスクであっただろう。しかしこの研究はベネディクトが長年抱いていた夢「見知らぬ国に行ってみよう」という思いを叶えるものであったのかもしれない。日本人研究は彼女に充実した時をもたらしたに違いない。『菊と刀—日本文化の型』は、戦時中の戦時情報局での日本人研究を一冊の本としてまとめたいというベネディクトの強い思いから生まれた書である。ミードが書いているように、彼女にとって日本研究は、「何を書けばよいのか、どのように書けばよいのかを決めるのに自分をおいて頼る人はいなかった」のである。日本人研究の書を出版したいという強いベネディクトの思いを垣間見ることができ一通の手紙がある。

「……『菊と刀』でベネディクトは日本人の同僚であるロバート・ハシマと戦時情報局の直属の同僚、そして原稿を読んでもくれた人に対しては謝辞を述べている。しかし、この本のなかの

国民性に関する一般的研究の先駆者であり、日本人の国民性に関する研究となったジェフリー・ゴラーについては一切触れていない。……」とミードは若干批判的な思いで書いている。(p. 426)

以前にも少し触れたが、戦時情報局時代ベネディクトの助手をしていたロバート・ハシマへのベネディクトの手紙のコピーを幸いにも手にすることができた。この手紙は1945年8月15日の日付でハシマに送られたもので、戦争終結後のベネディクトの複雑な思いや、日本人についてアメリカ人に「伝え」なければならないという責務を反映しているように思える。手紙はタイプで打たれたものではなく手書きである。一部を紹介することにする。

Yesterday evening as I hung over the radio at seven o'clock I kept thinking "I want to send Bob a telegram of thanksgiving." I was as happy that the slaughter had been stopped and as proud of the way Japan had brought it about and so thankful for the role the Emperor played, and I couldn't think of anyone who would understand all those feelings as well as you would ……

昨夜7時にラジオにかじりついて聞き入っておりました時、私はボブ（訳者注：ロバート・ハシマ）に感謝の電報を打ちたいとずっと考えておりました。もうこれで大勢の人が死ななくてもよくなったことで、どれほど幸せに思ったか、また日本がとった方法をどんなに誇りに感じたか、そして天皇陛下が果たされた役割に対して、どんなに感謝の気持ちをもったか、私はボブに伝えたいと思っておりました。こうした私の気持を理解していただけるのは、あなたをおいて他には考えられないからです。……

ベネディクトはこの思いを一冊の本にしたためたい旨を伝えている。その時は、どうぞ私を手伝ってください、と結んでいる。戦時情報局での日本人研究はベネディクトにとって実にチャレンジングなプロジェクトであった。戦後、すぐにはコロンビア大学には戻らず、彼女は日本人の国民性研究をまとめるのに心血を注いだ。この本は文化人類学者が書いたひとつのアメリカ人にとって「見知らぬ国」日本の話しである。そこではアメリカ式の民主主義も自由も独立心もそのまま受け入れるには無理があった。この本にはそうした彼女の文化理解の要素が余すところなく書かれている。そして思いもかけなかったことだが、その本が評判となり、彼女の名はあまねく全米で知られるところとなった。ミードの書いた文章から若干の嫉妬心のようなものが感じられるのもいたし方ないことである。ベネディクトは、日本人の行動の背景にある規範意識、価値規範を分析した。その結論部分は当時であってごく少数派の考え方であった。ベネディクトはおそらく理解者を求めて書いたわけではなかったであろう。

戦時中から戦後の研究を通してベネディクトの研究は孤独を強いられるものであった。しかし周りがどのように変化し、どのように言われようとも彼女が主張した理論には若干の修正はなされたが、核は終始一貫していたと思われる。それは「諸文化は独特であり、それ自体の文化の見地からのみ判断できるものであり、これらの文化的相違を認めることによつてのみ、人々

の間の協調が可能になるという考えである。」というものであった。戦後多くの人類学者は、文化相対性に関してスタンスを修正していた。つまり文化相対性への直接的な抗議は益々大きくなっていった。アメリカが戦争に勝利したことで相対主義は相乗的に批判的となっていった。しかし、ベネディクトはそうした状態にあってもアメリカの文化が絶対的なものではなく、文化相対性に深く結びつき、研究を通して異文化間で価値構造がいかに異なっているのか示そうとした。『菊と刀』には彼女のそうした思いが強く表れている。アメリカ人は、「国民的相違を尊重し、受け入れる」ことを学ばねばならない、と訴えた。『菊と刀』の成功からしばらくしての1948年9月17日にベネディクトは死亡した。その人生は波乱万丈であっただろうが、決して不幸ではなかっただろう。奇しくも死亡した日は彼女の尊敬する父親の誕生日であった。

References

- Benedict, Ruth “Japanese Behavior Patterns” 『日本人の行動パターン』 共著 福井七子、ポーリン・ケント、山折哲雄、NHK 出版、1997年
- Caffrey, Margaret, *Ruth Benedict: Stranger in this land*, Texas University of of Texas Press, 1989年、M・カフリー『さまよえる人 ルース・ベネディクト』福井七子訳、関西大学出版部、1993年
- Mead Margaret, *An Anthropologist at Work: Writings of Ruth Benedict*, New York: Houghton Mifflins Company Boston、1959年
- 『日本人の性格構造とプロパガンダ』福井七子訳、ミネルヴァ書房、2011年

戦後の歳月：繋ぎ合わさった糸

マーガレット・ミード

戦争が終わった時、ベネディクトは57歳だった。スタンレー・ベネディクトは死亡しており、エドワード・サピアも、フランツ・ボアズも亡くなっていた。コロンビア大学の文化人類学部では、ボアズやベネディクトが掲げた理想が抗議的となっていた。実際に口に出して抗議するというより示唆的なものが多かった。そのことからベネディクトは自分自身が孤立していることを察した。自分の学生が他の学生から少し距離を置いていると感じていた。

大学に戻るのを一年延ばし、本を書くことにした。この本はベネディクトにとって *Cups of Cray* の小論文以来、最も大切にしているものであった。日本の伝統の美しさ、この時代に日本人であることの悲しさ、日本人にもたらされた悲劇、そして日本の将来の方針を決定する責任があるアメリカ人は日本人を賢明に扱わないのではないかという危機感、すべてこれまでには扱ったことがないテーマをベネディクトは提示した。彼女は新しいテーマを扱うにあたって、新しいアイデンティティーと人脈を必要とした。こうしたテーマは『菊と刀』¹⁾（訳者注：ミードはベネディクトの『菊と刀』を *The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese*

Behavior としているが、これは *Patterns of Japanese Culture* の誤りだと思われる。) という本のなかで混ざり合い、ある同僚の文化人類学者によると、「あまりにも上手く書かれ過ぎていて読むのに夢中になり、そのなかの複雑な考えを見落としてしまう」ということだった。この本の中には、昔式の文化人類学の研究法の亡霊はなく、彼女に影響を与えていないにも拘らず先行研究として言及しなければならない義務もなかった。何を書けばよいのか、どのように書けばよいのかを決めるのに自分をおいて頼る人はいなかった。彼女の学生の研究、自分より若い同僚の研究は、彼女の考えの一部となっており、呼吸する空気となっていた。それに対してまとめて謝辞を述べておけば、個別になど述べる必要はなかったのであろう。『菊と刀』でベネディクトは日本人の同僚であるロバート・ハシマと戦時情報局の直属の同僚、そして原稿を読んでもくれた人に対しては謝辞を述べている。しかし、この本の中の国民性に関する一般的研究の先駆者であり、日本人の国民性に関する先行研究となったジェフリー・ゴラーについては一切触れていない。

この本は緊急に書く必要があったことは明らかである。本の最後の部分には以下の警告が書かれており、それは年月が経つにつれてますます妥当性を帯びることになった²⁾。

アメリカ合衆国ができないことは——それはどの国にもできないことであるが——命令によって民主的で自由な日本をつくることである。支配された国でそれがうまくいった例はない。外国人と習慣や考え方を共有していない人に対して、外国人が自分の生き方を別の国の人に押し付けることはできない。日本人の上下関係のなかにある「通すべき手順」を無視して、選挙で選ばれた人の権力を受け入れるように日本人を規制することはできない。アメリカで私たちが慣れ親しんでいる自由な人間関係、どうしても主張せずにはいられない独立心、友だち、仕事、住むところ、そして自分の責務を自分で選ぶとする情熱。これらを法律により日本人に受け入れさせることはできない。しかし、日本人はこうした方向に変わっていくことが必要であると自覚している。対日戦勝日以降、公の立場にいる日本人は、自分たちの良心を信じて自分たちの人生を歩むことができるようにしなければならないと言っている。もちろん口に出して言っているわけではないが、どの日本人も日本における「恥」の役割に疑問をもち、国民の間で自由が芽生えることを望んでいる。その自由とは、批判する恐怖から解放されること、「世間」の非難や追放から解放される自由である。

日本の社会的圧力はどんなに日本人が進んで受け入れたとしても、個人に対してあまりにも負担が大きい。自分の感情を押し殺し、自分の要求をあきらめ、家族、組織、国のために丸腰で最前線に立たねばならないような社会的抑圧である。日本人はそのような自己制御に耐えられることを証明した。しかし、そのような負担は非常に重い。害になるほど自己制御を強いられていた。心理的負担が少ない人生に飛び込むことが怖くて、日本人は軍国主義者に導かれ、負担がますます大きくなるような道を歩まされた。大きな犠牲を払ってきたために、独善的に

なり、自分たちの厳しい道徳観に達することができない人を軽蔑するようになった。

日本人は自分たちの攻撃的な戦争が「過ち」であり、無意味であったことを認めることで変化、変革に向かって最初の大きな一歩を踏み出した。平和な国々のなかで再び尊敬される立場を回復することを望んでいる。そのためには平和な世界でなければならない。もしロシアとアメリカが今後攻撃をするために武装したとしたら、日本はその戦いに参加するだろう。だからと言って、平和な日本が存在し得る可能性を疑っているわけではない。日本が戦う動機は、状況次第である。状況が許せば、平和な世界のなかで自らの立ち位置を見つけるだろう。そういう状況がなければ、武装した世界のなかで自分の立ち位置を見つけることになるだろう。

今日、日本は軍国主義が自分たちを導いた間違っただけの光であったことに気付いた。他の国でも同じように、軍国主義が失敗に終わるか否か、ようすを見ているに違いない。もしそれが失敗に終わらなければ、日本は再び戦争の情熱を燃やし、自分たちが戦争に貢献できるという力をみせるだろう。もし軍国主義が他でも失敗に終われば、帝国主義的な計画は決して栄光を得るような道ではないことを日本は深く学んだということを世界に示すだろう。

この本は日本でもアメリカでも大きな反響をよんだ。日本では、日本社会に関するあらゆる研究分野において注目され、議論的となった。日本の学会誌の一冊すべてがこのテーマのために当てられた³⁾。

『菊と刀』によって文化人類学者の他文化研究が好意的にみられるようになった。そしてエルナ・ファーガソン⁴⁾が書いているように、この本で行なわれている研究がもっと他の国でも行なわれるべきだと考えられるようになった。

この本を読み終わった時に沸き起こる感情は、政府がすぐにもベネディクト博士にお願いして、今後いっしょに暮らしていかなければならない世界の未知の人々のことをもっと研究すべきだということである。

ベネディクト式の研究はロシアやアメリカにおいても必要であることは何度も言われていた。ベネディクト自身、彼女が使った研究方法が世界を安全にし、世界に役立つと確信していた。ベネディクトと似たような研究方法で読者の反感を買うものもあった。結論をどうやって導き出したかをおおっぴらにしたので、読者は気まずさを感じたのである。ベネディクトにとって精神分析に頼らないということは、肉体に頼るといった無意味なことをしないということだった。1942年にジェフリー・ゴラーによって展開された日本の天皇に関する洞察⁵⁾を受け入れられなかった読者は、ベネディクトの本のこのような部分に魅かれた。またベネディクトは同世代のリベラルな考えをもっていた人々とアメリカ文化に対する基本的懐疑心を共有していた。リベラルな人たちは、自国の文化に同情しなくても、日本文化に同情的な理解を示すベネディクトを受け入れることができた。そしてアメリカ文化に対して懐疑心をさほどもっていなかった文化人類学者にも受け入れやすかった。この本は大佐が大將に、そして艦長が海軍大將に勧められても、わけがわからない内容だと突き返されるような類の本ではなく、「長髪の知識人の企

て」だと議員に言われるような内容でもなかった。この本の書き方は穏やかで、的を得ており、どんな敵もこの本に対して心を許してしまうような書き方だった。心を許さないのは極端な左翼者であるか、自分たちの日本滞在経験を通して頑固で偏った考えをもっている人たち、つまり他の異なった状況では、‘old China hands’ (かつてのアジア専門家) と呼ばれた人たちだけである。

『菊と刀』の人気は後に国民性研究に多大な影響を与えた。しかしベネディクトは本を完成した時にはこのことは知らず、コロンビア大学に戻った。コロンビア大学に戻り、戦争前にずっと彼女がやってきたように、小額の助成金への出願やフェローシップ獲得のために奔走したり、学生の助成金が足りないために自分のポケットからお金を出す生活に戻ると思っていた。これまでボアズ教授と一緒に使っていた忠実な助手と一緒にではなく、ボアズの伝統がすっかりなくなった学部で、一人で仕事をするようになった。それは一時的なものだったのだが。彼女はまだ准教授でしかなく、自分の学生を守り、援助する力がないことを強く感じていた。彼女は昔こう言っていた。「ボアズ先生と私の問題は、力はあるけれど援助者がいないということです。」彼女の助けなしには学生は完全に路頭に迷っていただろうが、彼女の助けで少しはましだった。彼女はこのことを気に病んでいた。彼女を正教授にすることは長い間強い反対を受けていた。なぜなら彼女は女性であり、「政治科学の学部は完全に紳士の集まり」⁶⁾であった。ベネディクトが正教授になったのは死の直前であった。それが自分の学生にとってどのような意味を持つのかわかっていたので、ベネディクトは喜んだ。

1946年6月にベネディクトは Annual Achievement Award of the American Association of University Women (全米女史大学人協会) の好業績をあげた女性として功労賞を受けた。その賞金2500ドルは大金だった。当時200ドルや300ドルを得るのに何週間もかかった時代で、私たちは当時無給で仕事することに慣れており、最初の日本に関するメモは50ドルで作成した。このことを考えると、2500ドルものお金を得たことはまるで世界がバラ色であるかのように思えた。秘書のような人も雇うことが可能となった。学部からはそうしたお金は出ていなかった。色々な人に補助金を与えることによって、一人の人は勉学を継続することができ、またある人は論文を仕上げ、またある人はフィールドに戻ってもう少しデータを集めることができた。こういったことを考えると、1923年に当時バーナード・カレッジで唯一の院生用のフェローシップであったキャロライン・ドゥラー・フェローシップを貰えなかったことを思い出す。そして郵便で次の手書きのメモを受け取った。

第一回手続き不用のフェローシップ、300ドル
ルース・ベネディクト
(フェローシップ担当者)

全米女子大学人協会の功労賞授与式でスピーチをした時、ベネディクトは次のように言った：⁷⁾

…私の感謝の気持ちを伝えるには、この賞によってどのような仕事を継続することができるかについて述べるのが一番だと思います。

3年前、私は戦時業務を援助するためにワシントンに呼ばれました。そしてこの秋にコロンビア大学に戻ってきました。戦時情報局で敵、敵国、そして占領地を含めた文明国の研究を命じられました。我々が度々直面する問題の解決法の調査をするのに、その問題を文化人類学者の視点から述べ、可能な限り文化人類学で慣れ親しんだテクニックを用いて、その解決法を見い出すように言われました。問題や人間の行動を記述したり、それらの問題を解決するテクニックは、文化人類学者がここ何十年かの間書き言葉を持たず、西洋からの影響をほとんど受けずに生活してきた小さな部族の研究をしてきたなかで培われてきました。…

戦争前から長きに亘って、私はこれと同じような方法が文明国を理解するのにも使えるのではないかと考えていました。その社会が身につけた文化的行動を真剣に研究することによって、国際理解を高めることができ、異文化間コミュニケーションの間違いを減少させることができると信じてきました。多くの人たちは、アメリカ人の何がアメリカという国を形成しているのか、フランス人の何がフランスという国を形成しているのか、中国人の何が中国という国を形成しているのかを問うてきましたが、その答えは印象に基づいたものであったり、歴史的、あるいは経済的、または政治的に狭義に定義されてきました。そのような質問に答えるために、どんなに原始的な部落であっても文化人類学者はデータが必要ですが、ヨーロッパの国に関するデータがこれまで不足していました。それらは記録されていなかったか、あるいは様々な調査や小説などに分散されていたからです。戦争中には、手許にあるもので間に合わせるしかありませんでした。これらの国々に直接行って観察することは叶いませんでした。しかし、ここアメリカには様々な国の人たちが居り、私はそうした人々と直接会って話しをすることにより、研究に不可欠な資料やコメントをたくさん集めることができました。

多くの時間をかけてアジアの国々の研究をしました。そして日本に関する研究は『菊と刀—日本文化の型』として本にまとめ、秋に出版されます。ヨーロッパの国々を理解するのにこのようなやり方で仕事を続けたいと考え、今日頂いた賞金はそれに使わせて頂く所存です。来年ヨーロッパ系の学生たちのためのセミナーをコロンビア大学で始めます。学生の何人かはフェローシップを受けている学生で、アメリカで教育を受け終わったら直ちに自分たちの国に帰る人もいます。何人かはアメリカに何年間か居住しているヨーロッパ系の男女です。こうした人たちに研究法のトレーニングを行い、アメリカ人の生活を観察

する機会を与え、気づいたことを報告するようにしてもらいたと思っています。アメリカが外部の人にどのように映るかという彼らの視点はとても大切です。訓練によって自分たちの受けた印象を記録することが可能になり、自分たちの判断を見直したり、書き直したりすることができます。彼らは自国に戻り、自分たちの経験を報告することができます。この訓練の目的は彼らが自国での生活を記録し、適切に述べるだけの技術を与えるということです。

そうした資料は後にその国でフィールド・ワークをすることによって補充されねばなりません。今説明したようなセミナーは非常に大きな貢献を果たすと信じています。適切な記述がどのようなものであるかという訓練に基づき、物事に対する反応を調節すれば、連合国が直面している問題を少しずつ考えることができるのではないかと思います。私は科学者と同じ信仰をもっており、調査によって答えが出るような形で問題を定義し、適切な方法で調査をすれば、どんなに異質な行動であっても理解することができると思っています。そして私は人道主義者と同じ信仰を持っており、相互理解は人類に貢献できることを信じています。

みなさまから頂いたこの賞金は、皆様がお考えになる以上に有効に使わせていただきます。研究者も同じですが、特に社会科学の研究者は最初の研究計画では見えなかったことが多いために、その研究をするチャンスをしばしば逃すことに対して仕方がないことだと思っています。また大学や基金が研究の一部の資金は出しても、しばしばもう一部は出されないことがあるのを知っています。そしてデータ収集の資金は集められても、その内容を書く段階になって学生が使えるお金がないこともよくあります。この賞金を私にお与えくださったことで、私は何の煩わしさもなく研究に使えるのです。他の賞金が使えない箇所、また事前に資金が必要だと予測できなかったことに、この資金を充てることができます。そのような緊急事態が起きるたびに、私を信じて賞をお与えくださった全米女子大学人協会に対してあらためて感謝を申し上げます。当協会はこれから行われるであろう研究と密接な関係を持ち続けられることは疑う余地もありません。

そして1946年にベネディクトはヨーロッパ文化研究学を開設し、自らが考案した新しい研究法を認めてもらうようコロンビア大学に戻った。戦争前の私たちの立場が逆になった。以前ベネディクトは懐疑的で、私たちは現代文化の人類学的研究を開拓するためにすべてのエネルギーを注いでいた。1946年にジェフリー・ゴラーはイギリスに帰った。グレゴリー・ペイトソンは東南アジアで20ヶ月を過ごして帰ってきたばかりで、原子物理学者の人たちとの協力に時間を捧げており、原子爆弾の発明によって引き起こされた新しい危機を、一般市民に知らせようとしていた⁸⁾。キャロライン・ザッハリー・インスティテュートのローレンス・フランクは思春期の子どもたちの適応に深い関心をもっていった。私はまだ戦争中の残務整理に追われてお

り、それは徐々に片付ける必要があった。

私たち全員はもちろんロシア研究が非常に重要であることは承知していた。同時に、ロシア研究は、政府のもとでしかできないことはわかっていた。なぜならベテランならともかく、初心者にとってはロシアに関するいかなる関心事も危険だったからである。

そんな状況で冬がやってきた。私たちは1920年代に学生や詩人がよく住んでいた、貧しくてもチャーミングなアパートでのパーティーに参加していた。このアパートは他の学生のアパートよりもさらに西の方にあり、ほとんど川の近くであった。そこは他の地区より危険な地域だった。1920年代の小さなアパートは貧しい学生にとっては家賃が高すぎて手が出ない状態だった。そこでのパーティーでルース・ベネディクトは突然発表した。「10万ドル手に入れる方法をみつけたわ。」彼女はなぜかうれしそうにしており、悪戯っぽくそれ以上私たちに言うのを拒んだ。誰一人として彼女が言ったことをまともに受け取らなかった。1930年代の初め頃、ある偉大な基金が文化人類学に500万ドル寄付しようと考えているという噂が流れた。それを聞いた私は、ニューギニアの山の上に座り、そのお金をどのように使うべきか考えた。そのお金の管理はラドクリフ・ブラウンに委ねられるという噂が流れた時、アメリカの文化人類学者はラドクリフ・ブラウンにお金が委ねられるのであれば、何ももらわない方がマシだと言い、その計画はおじゃんになった。その後私たちは以前と同じように小額のお金のために駆けずり回っていた。戦争中も事務係のお金を得るのは困難だった。

しかし、奇跡と思われていたことが本当となった。人間の行動に関する基礎的研究をするための資金がOffice of Naval Research（海軍調査局）に与えられ、ベネディクトはその資金を使った初期のプロジェクトをデザインする企画グループの一員として呼ばれ、課題を扱うのに必要な規模と範囲を決めるように指名された。

私たちは昔計画しており、結局日の目を見なかったプロジェクトの数々を掘り起こし、これまで蓄積していた資料を見直した。それにはすでに始まっているコロンビア大学の現代ヨーロッパ文化のセミナーも含まれていた。そして新しい計画が始まった。ワシントンにいたルース・ブンツェルはベネディクトと共にニューヨークに帰り、事務的な計画作成に取り掛かった。私はインタビューのための技術的なデザイン、インフォーマントの保護体制など最も経験がある分野に携わった。ルース・ブンツェルは初期資料⁹⁾を作成し始めた。それは、戦争が始まってすぐに軍の司令官オフィスのために私たちが作成した資料¹⁰⁾や、エドワード・サビアとジョン・ドラードのもとでエドレ大学でローレンス・フランクによって設立された性格に及ぼす文化の影響に関するゼミからの資料などを使って作成されたものである。学際的研究チームを組む方法、コミュニケーションの方法、フィルムや文学の分析法、一つの国の人について別の国の人に聞く方法、ある分野のスペシャリストに二つの違った方法でインタビューする方法。私たちが学んだこれらすべてを使うことになった。そして戦時中に何とか生き残り、平和時に居場所を見つけれられないような才能ある人たち、軌道からはずれた人たち、系統立った研究ができ

ない人たち、普通の仕事をするにはあまりにもかけ離れた仕事の仕方をする人たち、これらの人たちすべてが研究のなかに組み込まれることになった。幾つかの別々の研究グループが7～8つの文化を同時に研究し、グループ・メンバーは2週間ごとにゼミで顔を合わせ、お互いの考えを交換し合い、それによって倍の速さではなく20倍の早さで仕事ができるという計画だった。

初めは事務的困難が止めどなく続いた。戦争が終わったばかりで、使用できる場所もなかなか確保できなかった。コロンビア大学はこのプロジェクトのスポンサーになったが、助成金から部屋を借りるお金を要求した。そんなことは議会の承認を得なければならないようなことだった！ 援助したい人たちにはタスクを与える必要があった。そのためプロジェクトが本格的に始まるまで幾つもの小さなプロジェクトを作り、その人たちへの報酬を何とか生み出す必要があった。そしてやっと1947年の春、コロンビア大学現代文化研究が発足した。同年の10月に私がヨーロッパから帰り、ジェフリー・ゴラーがイギリスから到着すると、このプログラムはバイキング基金（1951年には文化人類学研究のヴェナー・グレン基金となった。）で行なわれた最初のゼミにより、正式に開設されることとなった。

私たちは、いくつかの狭いスペースをやっと見つけた。それは、あちこちに散らばっていた。コロンビア大学の一室、フランス大使館の文化担当参事官の事務室の一室、そしてキップス・ベイ・ヨークヴィルの保健センターの三部屋であった。多くても一回に10人位しか入れないようなところだった。アメリカ自然史博物館にあった私のオフィス、ルース・ベネディクトのコロンビア大学のオフィスも一部プロジェクトのために使用された。最初は非常に潤沢に思えた資金も、七つの文化に関する同時進行のプロジェクトを支援するには到底足りないことがすぐにわかった。そのため私たちがこれまで行なってきたようなやり方でお金を分配することになった。それはまず生活をしていくのに必要なお金をその人たちに与えること、タイプができない人のタイプの手助けにお金を充て、必要としていない人たちには当然お金もタイプの手助けも与えられなかった。

上下関係やステータスによって生じる摩擦は文化人類学の倫理に反するので、そういうことを避ける形で、研究当初から自分の資料に責任を持ち、インフォーマントとの関係にも責任を持つという形でプロジェクトをデザインしなければならなかった。プロジェクトには元政府に勤めていた人も多くおり、そういった人たちは序列を意識する傾向があった。様々な国からの参加者も多く、彼らは尊厳に対する自分たちなりの考えを持っていた。現代文化研究プロジェクトを中心に組織図が作られた。特定の文化を研究するいくつものグループが置かれ、重要人物は組織のなかで二つ以上の役職を持っていた。ベネディクトはディレクターとして名前があがっており、その上にコロンビア大学、そして海軍調査局があった。ベネディクトは同時にチェコ文化のグループ長でもあった。私はリサーチ・ディレクターで、ジェフリー・ゴラーとともにロシア・グループの共同責任者であり、フランス文化のグループ・メンバーでも

あった。合同セミナーの場合、一回に75人位集まったが、どんなに若い大学院生でも、事務的な秘書もグループの正式メンバーと見なされた。各文化の研究をしている小さなグループは、メンバーの家に集まり、インタビュー・ルームがなかったために自分たちの家、あるいはインフォーマントの家でインタビューを行なった。政府との契約では賄えない費用は、A.A.U.W.（訳者注：American Association of University Women、つまり、全米女子大学人協会）からの賞金やベネディクトの論文や講演会から得たお金で支払われた。日曜日に行なわれる仕事代、年配の女性にあげるお花代やタクシー代、そしてレストランでしかインタビューできない場合の食事代などがそうであった。

ボアズとベネディクトは研究所や統合された研究のあるべき姿を長年夢見てきたが、このプロジェクトを全体で見ると、その夢を具現化したものだった。ボアズとベネディクトは、研究所や統合された研究を厳格で決まりきったものとして捉えず、研究をするための単なる枠組みとしてみていた。ベネディクト自身はもちろん給料を受け取らなかった。そのため、他の人がボランティアで働くことを受け入れることができ、仕事に満足できなければ批判もでき、拒否もできた。120人近くの人が参加したこの学際的プロジェクトの歴史のなかで、方法や概念に関する重要な議論は全くされなかった。私たちは全面的に資料に集中した。各グループはそれぞれ異なった構成になっていた。なぜなら各グループはメンバーがもっている特別なスキルで成り立っており、それぞれのメンバーは、自分たちの能力をどのようにしてうまく使うか考えなければならなかったからである。「心理学者」を求めるとか「社会学者」を求めるといったそれぞれの分野によって人を探すことはしなかった。すでに他の分野で何年か仕事をしてきた人たちを雇った。そのため彼らの可能性を知っていた。またプロジェクトに参加したいと言ってきた人たちを雇うこともあった。

プロジェクトのなかには色々な記録を保存するシステムが組み込まれており、すべてのインタビュー、セミナー、レポート、グループ討論は今日でも私の研究室に保管されており、学生に使われ続けている。長年ボアズとベネディクトは忍耐強く学生や同僚の書いたものを無給で編集したり、書き直したりしていたが、その作業は、プロジェクトに組み込まれ、そのための予算が作られた。その作業を受け継いだのは、エリザベス・ハーツォグで、論文を書く段階でまだ文章が書けない人の手伝いをした。

プロジェクトの初期の段階で発表されたのは偉大なるロシアの国民性に関する形式化、フランス文化の中心的テーマに関する提言、そして東欧ユダヤ文化を国境を越えた一つの文化として認めること、「子育て」や子供時代の後半を重要視するのではなく、方法論的に幼児期も重要な時期として重視すること、そして文化について書く時の新しい基準を提言したことである。それは、対象となっている文化に属している人が読んだとしても、そうでない人が読んだとしても、理解できるように書くということであった。

しかし、たとえ上席の人々すべてが時間を提供し、みんなが自分たちの原稿を自分でタイプ

し、自分たちのアパートを拠点としても着々と仕事が拡大し続ければ、お金がもっと必要になるということは1948年の春にはすでに明らかになっていた。何らかの報酬を支払わねばならない特別な技術をもった人がプロジェクトに新しく加わった。世話を必要とする大学院生がさらに増えた。そのためルース・ベネディクトは第二回目のロシア・プロジェクトを始める交渉をRAND¹¹⁾と行い、カーネギー財団と契約を結んで、本を書くことにし、そのため多額¹²⁾の前払いを受け取り、それをプロジェクトに充てた。資金を得ることによって、グループがプロジェクトに注ぐ力は活気を増していった。しかし働き方は、ボアズがいた頃に築かれたものと基本的にあまり変わらなかった。そこではメンバー一人ひとりができるだけのことをし、ある範囲内のお金のなかから支払われた。資金がない時には何も支払われなかった。そして各メンバーは人間として扱われた。その人の能力、欠点、文化あるいは職種によって定められたその人の長所、短所、その人が気づかない点、その人に子どもがいるかどうかといった家庭状況、精神状態といったすべてが考慮に入れられた。機嫌が悪いとき人は、「ルースは研究とカウンセリングの区別ができない」と言った。同情や聴く耳を持つこと、そして相談者といっしょになって悩むことが専門家に委ねられ、問題解決をするには精神分析家に行かねばならないと考えられていた時代にあって、ルース・ベネディクトはずっと前からもっていた彼女の考え方を变えることはなかった。彼女は居心地がいい職場のなかで、本来の自分を実現することは重要であり、教師は学生が、自己実現できるように手助けをする義務があると考えていた。

1948年5月、このプロジェクトが最高潮に達していた時、ベネディクトはチェコで開催されるユネスコのセミナー¹³⁾に招かれた。この招待を受けることによってベネディクトは、ポーランド、チコスロバキア、オランダ、そしてベルギーといったこれまで遠距離で研究していた国々の文化を直接体験できることになった。これはベネディクトにとって非常に魅力的なものだった。なぜなら終戦直後のドイツを直接研究するチャンスを彼女は逃していたからである。その時、ベネディクトの健康状態を考慮して軍医がドイツに行くことを認めなかったのである。

ベネディクトは非常に弱々しく見えた。1948年6月にベネディクトのあの素晴らしい線画を描いたエリック・エリクソンはその時のベネディクトの様子について次のように書いている。その年の6月にまだ61歳の誕生日を迎えるベネディクトについて、61歳そこそこの年齢にもかかわらずまるで死にそうな年老いた女性の顔を描いている気がした。ヨーロッパに行くべきか、プロジェクトの真っ最中であるにもかかわらず、リスクを冒してでも行くべきか。ベネディクトはどうしても行きたかった。戦争中の何年もの間、ベネディクトはフィールド・ワークなしに、他の人が見た事柄を通して物事を自分なりの解釈しようと努めた。離れた所から懸命に考え出したパターンが現実とつながっているのかどうか、自分の感覚を通して観察したいという強烈な願いが戦時中に積もり積もっていた。そのため私たちは彼女に言った。「お行きなさい。あなたがそうしたいならそうしなさい。」これはベネディクトが教師だった頃に常に言っていた言葉だった。

その夏ベネディクトは求めていたことを実現することができた。セミナーは成功した。ヨーロッパ中の人が未だにそのセミナーについて語っているほどである。ベネディクトは自分の考えていたことが正しかったと感じた。チェコ人が小声でささやくようなことをポーランドでは声を出して言っていた。オランダではオランダ人に案内されて絵画を見た。ベネディクトはブリュッセルの国際文化人類学の会議にも行った。この会議に出席していた二人の若い文化人類学者によると、ベネディクトはブルッセルで疲労のためこの二人との約束を守ることができなかったそうである。

ベネディクトがニューヨークに戻って二日後、夏の出来事を私たちに話す時間や、私たちが新しいプロジェクトの問題点を彼女に伝える時間もないまま、ベネディクトは管状動脈血栓症の発作を起こし、病院に連れて行かれた。心臓の病気で安静にするには、すべての心配事を忘れなければならないと医者に言われた時、彼女は安らかに微笑み、「友達がみんなやってくれるわ」と言った。その後彼女が生きていた5日間、ルース・バレンタインがカリフォルニアから戻るまで、ベネディクトは仕事の話は一切せず、静かに生きることに力を注いだ。

ベネディクトが亡くなった時、彼女はとても老けてみえた。何百年もの知恵と苦しみが一瞬の間、その顔に表れたようだった。その瞬間の顔は一人の等身大の人生以上のものであった。彼女はいつも死者の美しさに対して強い思いを持っていた。ベネディクトが亡くなった後、私たちはその姿を子どもたちみんなに見せた。それによって子どもたちは死が人生の一部であることを受け入れることができ、今日多くの子どもたちが得られない知識によって守られることとなった。

注

- 1) *The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Behavior*、ボストン、ホートン・ミフリン社出版、1946年
- 2) 前掲書、314-317ページ
- 3) ジョン・W・バネットと永井道男による“The Japanese Critique of the Methodology of Benedict’s *The Chrysanthemum and the Sword*”. *American Anthropologist*, LV, No.3, 1953年、404-411ページ。この論文は『民族学研究』14、4号、東京、1949年の『菊と刀』特集号に収められている。
- 4) *New York Herald Tribune Weekly Book Review*, 1946年、3ページ
- 5) ジェフリー・ゴラーの論文“Japanese Character Structure and Propaganda, a Preliminary Survey”, 1942。この未出版の報告書の一部は *The Study of Culture at a Distance*, マーガレット・ミード、ローダ・メトロー編集のなかで書かれている。シカゴ大学出版、1953年、402ページ
- 6) *Ruth Benedict: A Memorial* のなかでロバート・リンドによって引用、ニューヨーク、ヴァイキング・ファンド出版、1949年、23ページ
- 7) 1946年6月の原稿のタイトルは「全米女子大学人協会で年間功労賞の受賞者の言葉」
- 8) グレゴリー・ベイトソンの論文“The Pattern of an Armaments Race,” 「武装競争のパターン」*Bulletin*

- of the Atomic Scientists, II*, 5～6号、10～11ページ (1946年)、7～8号、26～28ページ (1946年)
- 9) Columbia University Research in Contemporary Cultures, Manual for Field Workers, 1943年、謄写版印刷
- 10) グレゴリー・ベイトソン、ルース・ベネディクト、ライマン・ブライソン、ローレンス・K・フランク、マーガレット・ミード、フィリップ・E・モズリーそしてルイズ・M・ローゼンブラットらによる Suggested Materials for Training of Regional Specialists, Army Program, 1943年、謄写版印刷
- 11) このソビエトの文化に関するプロジェクトはマーガレット・ミードのリーダーシップのもとでアメリカ自然史博物館の援助で行なわれた。
- 12) このお金はルース・ベネディクトの死後に返金された。
- 13) このセミナーは1948年7月21日から8月25日までチェコスロバキアのポデブラディで開かれた。*The Influence of Home and Community on Children under Thirteen Years of Age* 参照。この論文は、*Towards World Understanding* 第6巻、パリ、ユネスコ出版に掲載されたが、出版の日付はない。

戦後世界における文化の多様性を認識する*1)

アメリカでは、自分たちの文化とは異なるからといって他の人種や文化を意識的に研究の対象とするのは、かなり特異な研究とされてきた。そういった研究はイギリス帝国やドイツでのように実用性があるものではなく、国家として考慮しなければならない事柄からかけ離れていた。しかし戦争はこのような状況を変化させ、その変化の度合いは益々大きくなっている。我が国の経済の発展と衰退は、私たちの行動や態度とは異なる社会秩序をもった国々の人たちとどう関わっていくかにかかっている。戦後の指針となるとは全く予期されていないところにこの奇妙な状態がアメリカ人の前に現れた。それまで、アメリカでは、何百万人ものヨーロッパ人がアメリカ人化されており、この国をあげての経験を通して、外国人はすべからずアメリカ人になりたがっているのだと硬く信じていた。それはこれまでどの国も経験したことがなかった。この確信は私たちの国民性の最良の部分、正義に対する倫理的確信、武力だけを使うのを拒否する姿勢と深く関わっている。私たちの文明の恵みを受け入れてもらうのに強制する必要はないとアメリカ人は信じている。そんなことをしなくても、彼らは私たちの文明を受け入れたいのだと確信しているのである。

戦後の世の中において私たちはこれまでとはかなり違った状態に立たされている。国々の相互協力により連合国の活動がうまくいくに伴って、文化間の理解がますます必要になってくる。西洋諸国が他国に対して政治的あるいは産業事業においても独裁的であった時には深層にある文化の多様性は、事実上、それほど重要ではなかった。そのような関係においては外国人は全体の文化のごく一部を扱うのみで、自国がかかわる文化の孤立した一部分だけ理解しておればよかった。しかし、戦後世界の連合国との協力において、ルーズベルト大統領は「人類の平和と自由の根底となる永続する世界理解の基盤を築かねばならない」と言っている。その目標

を実現させるため、理解につながる知識を持たねばならない。

戦後世界において連合国が永続する世界理解の基盤を築くことを考えているのであれば、私の分野である文化人類学からみた幾つかの考えをこの論文で提示したい。世界のすべての人種を扱わねばならないのだが、人種の違いに対するアメリカ人の反応は決まって他人種に対する優越感か劣等感かである。しかし人種に関する科学的研究が証明することは、動物の肉体的違いがその動物の特異とすることの現われとなっているのに対し、人種の肉体的な違いはそのような機能をあらわしているのではないということである。人間以外の家畜では、肉体的な特徴によってある犬は狩に適していたり、別の犬は荷物を引っ張るのに適している。しかし、人間においては人種の違いは髪の色や鼻の形や頭の形状であったり、肌の色だったりする。より役に立つ髪質とか鼻や頭の形などをもっている一つの人種がいるわけではない。熱帯地において白い肌をしていることで痛い目にあうということもあるが、ほとんどの白人は熱帯地でもやっていける。

科学的研究によって、一つの人種が優秀な人種を独占しているということはないことが証明されている。高い知性、健康な身体、そして高い道徳観はすべての人種において存在し、すべての人種においてよい社会条件によってこれらが増大することがわかっている。人種差別の傲慢さは、人種に関して科学的に証明されたことを無視した傲慢さである。人間社会や人間たちの重要な違いは、生物学的なものではない。それは文化的なもので、戦後の協力的な世界ではこれらの文化的違いを理解することが求められる。この真実は再建事業において食べ物を必要とする人たちが受け入れられるような食料を提供し、その人たちが住み慣れたような家を提供すべきだということに受け取られがちである。もちろんそうなのだが、文化人類学者が言っているのは、そうしたことではない。文化人類学者が言いたいことは、自分たちの文化あるいは異質な文化を推測する時、その文化は歴史の産物であり、人間が作ったもので、どうしても偏ったものであることを受け入れなければならないという点である。人間のすべての可能性を実現した文化などあり得ない。どの文化も人間の一部の能力、精神的、感情的、道徳的可能性の一部を選択し、他を抑圧している。それぞれの文化は、一つの価値体系であり、その価値体系は他の価値体系を補足することもあり得る。ある社会の人間の幸福²⁾が文化によって増大したり減少したりするということはあっても、一つの文化がすべてを含むことはない。一つの文化のなかで生活している人にとって、どのように自分の存在に秩序を与えるかは、自動的におこなわれることであり、もし習慣とは逆のことを要求されれば、彼らは効率的に動くことができない。

これら文化の型は、その文化においては統一性がある。それらの特徴は偶然に集まったものではない。それらは必然的な特徴なのである。なぜならこれらの文化的特徴は、習慣的な肉体や考えをもった生きた男女によって受け継がれているからである。文化によってはそれらの特徴に統合性があり、他の文化では統合性が薄い。非統合性が限界を越えると、その社会にカオ

スをもたらし、社会の構成員に致命的な心理的葛藤をもたらす。文化人類学者は小さいこじんまりした原始集落における非常に統一的な価値制度をあちこちで見ている。こういった社会をいくつも見た後に、近代的文明を較べたとしても、これら原始社会が体系的で統一性があるように見える。幼児期あるいは思春期において、そして生涯を通して特定の行動が社会によって賞賛され、それが態度や行動の基盤となり、政治的に統一され、階級関係や取り引きにおける土台となる。ある集団の人たちの態度や行動はつながっており、そのどれをとっても全体の構造との関連性のなかで考えなければ意味をもたない。一つひとつの部分は建造物のなかの一つのレンガのようなもので、どんなに小さいと思われるものでもむやみにレンガを取り出してしまえば、構造全体が崩れてしまうかもしれない。これは変化が不可能とっているのではなく、変化は既存の建物に合わせてもたらされねばならない。

アメリカが解放しようとしている枢軸国の支配下にあった国々、既存の文化の協力を得て我々が支配しようとしているアジアの国々、そういった国の人々の生活を学問的に理解することは必要不可欠のことである。これらの国々の人たちはごく一般的な私たちの要求に反応しないかもしれないし、私たちにとって非常に魅力的な報酬にも価値を見い出さないかもしれない。世界平和にとって致命的となり得る危険なことは、私たちが彼らの文化的価値観を知らずに彼らとぶつかり合い、深く考えずに自分たちの価値観を相手に押し付けるという昔からのパターンに陥りがちになるということである。

そのような行動のなかで私たちの将来に対する警告となり得るような一つの例をあげて説明したい。民主主義そのものの実践とイデオロギーに関わる例である。民主主義をどの文化にもわかるように説明するとすれば、リンカーンの用いた言葉を使うのがふさわしいだろう。「人民の人民による人民のための政治。」しかし民主主義の定義は場所に依じて様々な事柄が加えられ、それらによって人々は自分たちの声を聞いてもらう。それはアメリカでは特により多くの人々を巻き込む寛容さであり、政治であり、党の制度である。そのように定義された民主主義に対して、私たちは強い倫理的な責務を持ち、それに対して忠誠心を尽くす。戦後世界の他の国々と協力するにあたり、アメリカ人はこの忠誠心により自分たちの制度を導入することが民主政治を構築する確実な方法だと信じがちなことである。

アメリカにおいて大多数の人の意思を受け入れ、少数派を守ることをいうことと、民主主義は分けて考えることはできない。それは二つの党をもった制度で、両党が対立していない場合でもその制度が運用されるには、対立があるかのようにふるまわなければならない。私たちの政治制度は必然的に「与党」と「野党」があり、制度がうまく機能するためには、野党は自分たちの対場を変える権限をもっていなければならない。つまり与党は、野党が与党になる可能性を残しておかねばならないのである。大多数の人が一般の人の幸福を考えて話し、行動するというのが私たちの文化における確固たる定理である。しかしこのような制度をもたない文化においては、必ずしもこのようには考えられてはいない。私たちの制度においてどちらの党が

より市民のことを考えているか、あまり選択の余地はないかもしれない。私たちの制度の基本は与党も野党も自分たちのために、そして自分たちの利益のために行動することである。

この制度をもった社会に生まれ育っていない人たちから見た私たちの社会の危険な部分を指摘する理由は、北米やオーストラリアと同じような民主主義制度をもっているのはヨーロッパの西の端しかないことを強調したいからである。北米やオーストラリアの民主主義は他の地域にとっては異質なもので、短期的であったり、もろいものである。それに対して世界の他のところでは自分たちで築いた民主主義がある。私たちの民主主義は、あらゆる状況で表面化する対立する利害関係の定説に基づいている。それに対して他の地域の民主主義は、両立可能な利害関係の定説に基づいている。和解のカギはどんな時でも善意をもった人々によって見つけることが可能なのである。

もちろんどちらの定説が客観的に正しいかは言えない。一方の制度は集団のなかのいつでも存在する人間関係の一側面を取り上げ、発展させる。もう一方の制度は別の側面を選ぶ。地元のさまざまな利益を調整することを選んだ文化は社会的決断に達したり、グループ・プロジェクトを実行するのに一部の人たちを置き去りにはしない。「外部の人」「内部の人」という区別はない。社会的行動はすべての村民と近い関係にある長老たちの協議会を通して『地域集団』によって行なわれる。この協議会は重大な責任をもっている。たとえば州の税金を支払われることを確認したり、地域がスポンサーとなる公共事業の労働者を決めたり、年中行事のお祭りの手配をしたり、必要に応じて土地を定期的に家族に分配したりしていた。長老たちは自分たちの地位を守るのに絶えず身分証明書を持ち歩かねばならなかった。税金や家賃を集める時もそうだった。家主や国のためではなく、村のためにそうした。社会秩序や社会活動のために人を拘束するのは村の連帯を保つためであった。

このような政治組織のよい例として中国があげられる。たとえここ数年間に色々変化があったとしても、中国の伝統的なやり方は文化の基本となっている。中国は偉大な民主主義国家だと誰もがいうだろう。しかし中国が民主主義社会だと言われているのは、その国家のあるいは地方の行政ゆえである。こうした地方行政には人々を代表するような集まりや、選挙で選ばれた役人はいない。このレベルでは人々の声は反映されていない。政治的にいうと、中国は組織立った地域の責任があるという意味においてのみ民主主義国家だと言える。

ひとつのコミュニティは二つのグループの責任ある市民から成り立っている。ひとつは全ての家族の世帯主から成り立っており、もうひとつのグループは学者、広大な土地の地主、そして特に名誉ある地元の市民で成り立っている。これらの二つのグループはどちらも地方や国の組織に物言う権限はもっていない。地方と国の政府は世帯主のグループに税金の額を伝え、世帯主たちは税金徴収係のためにこのお金を用意する。地元の防衛、水路などの管理、年中行事や儀式の企画は地方協議会の仕事である。1938年には、これらの仕事のほかに、地元の農場主や産業組合の交流を盛んにする活動も政府の支援によって加えられた。

規則を破る者は通常、家族が対処した。道徳に反した者が年上であろうと、年下であろうと、見放すことはせず、改心するように仕向ける努力をした。重慶の政府は、世帯主という地位を法で定め、その領地のなかで法に背いた人がいた場合、世帯主の責任とした。村の信頼を裏切った者は、別な方法で対処された。もし官僚が村民の資金を自らの私服を肥やすために使った場合、あるいは地主や国の役人から賄賂を受け取った場合、罰として追放された。正式な決まりがあったわけではないが、そのような罪を犯した人は冷たく扱われ、10年位遠方に追放された。

中国の民主主義制度においては、「野党」も「与党」もなく、選挙もなく、少数派の権利を守るような制度もない。

同じような状況にある Punjab の一地域についてハーバート・L・マシューズは、ニューヨーク・タイムズ紙に次のように書いている。「西洋人が考える民主主義とか国家主義とは異質のものである。」しかしカプタラの村人は自分たちの政治的そして集团的平和に満足しているとマシューズは言っている。カースト制度は、社会を分離する世界で最も極端な制度であると西洋人は印象付けられているが、Punjab 地方全体で整備された地元の責任制度はカースト制度まで含めて、すべてがうまく機能するようになっている。西洋人が持っている印象のもととなっているのは、学校で政治団体の組織について勉強するとき、村人が一緒に活動し、責任を持つ村組織の存在がカースト制度と比べてないがしろにされているからである。Punjab 地方ではカースト制度があるにもかかわらず、このような村組織が効果的に機能している。

ロシアでは地域社会の共同体が会計業務を行なうだけでなく、その地域にいる家族に定期的に土地を再分配する責任をもっていた。すべての家族の共通した特典は、農地を個人で所有はできなくても個人で使用することができることで、16世紀から19世紀の中頃まで地元の行政の主たる任務は首都が集めた税金の対処であった。小さな行政機関は大きな行政機関に融合され、お互いに税金を支払う保証をし合った。

地元の相互援助や共同責任のためのこのような村組織は、南ヨーロッパ、中国そしてインドやロシアにみられる。

ポーランドの状況は主に東ヨーロッパでみられる例である。土地は家族に属するが、牧草地あるいは森林は村によって所有されている。大勢の親族を含む大家族で土地を所有するのではなく、血のつながりがある家族だけによって土地は所有されるようになった。共同体である村は、いまだに基本的な単位である。地域に関わる事柄は、村に1年以上住んでいて、24歳以上の人から成る集団によって話し合われる。大きな村では、委員会の委員が選ばれる。委員は保険・教育・道徳違反・作物の破壊・生産手段の盗難・火事・村の会費の使い方や苦情などを扱う。賃貸で成り立っている地域も、土地所有者で成り立っている社会もあまり違いはない。賃貸で成り立っている村の人々は、過剰な取り立てに対して反発して怒りを表わし、それが多くの場合効果的であった。苦情の手紙や面と向かった抗議が失敗に終わると、村の人々は地主

の倉庫や他の所有物を攻撃した。そうすることで自分たちの言い分を申し立てた。1933年にポーランドが農民の所有する土地を作るために、大きな私有地を配分した時、配分された土地は村の委員会に渡され、委員会が村人に配分した。

草の根的な民主主義は東と西ヨーロッパの広い地域の民族生活に浸透していった。村の委員会は村人に信用されていた。なぜならこれらの委員会は社会に対して直接責任があり、村人の声はすべての決断に反映されていた。しかし同時に、あらゆるところに外部からの力も加わり、それは村人の考えと相反するものもあった。外部からの力は、国によって違った。それは、過剰な要求をする地主であったり、時には神父であったり、また時には国の官僚だったりした。生活苦に陥った時、あるいは村の責任を果たすことができなかつたりした時、村人たちはこれら外部の人たちに自分たちの苦悩をぶつけた。

このような国が枢軸国の支配から解放され、軍が行政を司る場合、地元をしっかり根づいた連帯感呼び起こし、復興に役立たせることができる。これらの国はどんなに破壊されていても、長年に亘って培われた集団の協力体制が呼び起こされることで地元の復興は可能となる。アメリカとは対照的に、地域計画の経験を持っているのは地元の集落である。地元のリーダーである *starista* や *gospodar*、あるいは *wojt* は戦後のキャンペーンにおける中尉（lieutenant）にあたる。その土地の民主主義の形を知らぬに、地元のリーダーを無視するようなことをしてはならない。

これらの国の政治的配列も重要である。政治的配列がうまく機能するためにこれらの国で生み出された行動パターンはアメリカ人にとっては異質なものに見えるかもしれない。何世紀もの間、彼らはお互いの利害に折り合いをつけてきた。そしてお互いに助け合うことを何世紀も行なってきた。それによって彼らの性格が形成されてきたことを私たちは理解しなければならない。彼らは私たちとは異なり、共同作業をすることでみんなが利益を得ると信じ、そう行なってきた。人を助けることで自分も人に助けられるという格言を、彼らは道徳としてではなく事実として受け止めている。他の人たちの利益を犠牲にして自分の状況をよくする人たちのことを、彼らは非難する。集団全体の利益を個人の利益より尊ぶというわけではない。人々と協同で行動することが個人の利益となると考えるのである。

アメリカ人の性格構造は異なった経験によって構成されている。私たちの「荒削りの個人主義」は、私有物に対する集団の責任を強く嫌うことを意味している。私たちは商品の価値とそれによって得られる利益を自由に決めることを要求する。それはアメリカン・ドリーム、つまり個人が事業で成功することと切り離すことはできない。他者が働く状況を改善し、事業を推進していくことは、どのアメリカ人も主張することである。

ヨーロッパの諸国でも個人主義は強く、しばしば見られる。しかしヨーロッパでは無限の経済的な自立を求めているのではなく、支配と服従に縛られない人生を求めているのである。労働者は自分たちの労力と利益を一緒に出し合うことはするが、誰かのプロジェクトのために働

くのだとすれば、それについて意見を述べることができなければ受け入れない。彼らの「荒削りの個人主義」は自由企業 (free enterprise) とは相容れず、彼らは、いわゆる「甘い」生活を嫌悪する。私たちの文化のなかでは個人企業の成功を象徴するような贅沢品に対して価値を見出さない。

これらの国々では過去何十年間に渡って、私たちが慣れ親しんでいる個人主義が浸透してきている。もっと多くの人たちが競争市場のために物を生産しなければならなくなっており、さらに多くの人たちが自給自足の農場を捨て、労働者として働かねばならなくなっている。これらのことはやむを得ない変化や闘争をもたらしている。

戦後の再建の背景には、このような状況が存在しており、こうしたこととうまく折り合いをつけねばならない。両方の生活パターン、そして二つの生活パターンの軋轢も知られている。そのため私たちは、それぞれの分野での軋轢にうまく対処する歴史的方法を理解しなければならない。彼らは二党制度の経験をもったことがない点を理解しなければならない。二党制度は野党が与党になる権利をもっていなければ存在し得ない。誰かが集団を侮辱した場合には、その人を追放するのが適切だということを彼らは経験から学んでいる。しかし集団からはずされた人々の数が増えると、このやり方は革命や不和をもたらす。村人や領主の反対が激しくなった時にも不和や革命は起きる。これらの国々が伝統的に主義として掲げてきたことは、それぞれの意見は折り合いをつけることができるということである。しかしそれが失敗に終わり、力があるグループ、あるいは頭数が多いグループ同士が対抗すると、それは派閥主義や暴力を生み、社会に深刻な脅威をもたらす。

この地方の国の一つの派閥が権力を手に入れた場合、私たちはそのような体制を全体主義と呼ぶ。しかしこのように権力を手にすることは、危機状態のなかでのこれらの国々の民主的なやり方において避けられない結果なのである。彼らは集団から追放するという古い習慣に未だに頼っているのである。アメリカ人にとってこれは民主主義の決定的な崩壊である。しかし、彼らにとって重要な点は違うところにある。彼らは昔からある村の民主的な方法で全体主義制度を審査するのである。たとえば色々な設備が整ってきているか、もし統治体制が人々の暮らしをよくしているとすれば、彼らにとってそれは民主的なのである。もしよくなっていなければ、専制主義なのである。彼らの審査は私たちのとは異なるが、どちらも文化によって築き上げられたものである。

解放されたヨーロッパの国々を扱うにあたって、彼らの価値観を尊重すれば、よりうまくいく。私たちの価値観を押し付ければ、相手に嫌悪感を抱かせるだけである。真の共同体の形成に進むにあたって、各国では違った方法でそこに向かって行くということを理解すれば、私たちは確固とした地盤に立っているといえる。彼らは違った社会形態で、違った経験をしており、彼らの性格構造は異なるのである。比較文化の観点から見ると、それぞれの国が再建に成功しているかどうかを判断する普通の基準は、一般的な福祉がよくなっているかどうかをみること

である。

長い間民主的な選挙を試みてきたピレネー山脈とアルプスの北にあるヨーロッパの狭い西の地域以外では、戦後の共同体の国々は私たちとは異なった価値観によって築かれざるを得ない。後には私たちの方法を適用するかもしれないが、それは私たちの方法すべてではなく、直ぐにでもない。何世紀もの間の経験に蓄積された移行期に、それが失われてしまえば不幸である。彼らが提供する資料を探らねばならない。それは彼らの非政治的方法で地元の意見を代表させる経験だったり、みんなの意見を調整することができるという考え方であったり、労働力や利益をみんなのものとする彼ら特別な習慣だったりする。解決しなければならない手元の問題がドナウ川の流域開発であろうが、解放後の最初の収穫を得ることであろうが、親から引き離された宿無しの子どもの世話であろうが、彼らの性格構造や習俗を知らなければならない。彼らの特定の文化にたよる生き方を、私たちは理解しなければならない。

注

* American Academy of Political and Social Science, Annuals, 228号、《1943年7月》、101-107ページ

- 1) この論文は Council on Intercultural Relations (後の Institute for Intercultural Studies) のプログラムの一部として発表された。Council on Intercultural Relations (異文化関係に関する協議会) は近代文化に対する体系的理解を促進し、戦後の世界で各文化圏が自分たちの文化価値を維持し、強化できるようにすることを目的としていた。
- 2) 文化によってその社会の人たちが掲げる目標は異なり、それによって違った人格が形成されるため、社会によって何が幸福であるかは様々である。

